



視察に訪れた福島県(帰宅困難地域)



前職のひょうご震災21世紀研究機構主任研究員時代



研究テーマは内閣府の総合調整

首相を補佐する組織の位置付けを追究 内閣府の多様な役割を検証

大学院人間社会科学研究科 助教

小林 悠太さん

1989年生まれ。九州大学法学部卒。大阪大学大学院法学研究科博士後期課程修了。2020年4月から現職。広島大学では現代日本政治論を担当。

■研究のきっかけ

大学1年生だった2008年にリーマンショックがあり、政権交代が起きました。その後、11年に東日本大震災が発生し、政権が右往左往しました。そうした中で、政治の動きに興味を持つようになり、首相を手助けする中央省庁の組織を調べてみたい、と思ったのがきっかけです。

■テーマ

外務省や財務省、法務省などは、それぞれに専門の持ち場があります。ただ、少子化対策や防災対策のように、内閣が進めようとしている政策には複数の省庁にまたがるテーマが多くあります。そのため、相反する各省庁間の利害を調整したり、どのような法律で対応するのかを決めたりする組織が必要になります。その役割を担う内閣府や内閣官房などです。普通の人にとっては分かりにくい組織を、シンプルに紐解きたい、と研究を進めてきました。

■研究の成果

行政機構の組織的な変化を追って

いく中で、内閣府の組織を作っていく発想には2種類があることが分かってきました。

一つは、経済や防災など国の優先順位で上位に位置づけられるテーマは、首相の強い司令塔を作るという発想です。その組織に基づいて、国を一つの方向に動かしていきます。

もう一つは、トップダウンとは違う、公安や司法などとの調整が必要な仕事も内閣府が引き受けてきたことです。例えば移民2世や3世が日本に帰ってきた時の定住の問題をどう扱うかなど。首相としては、困難な課題なのですが、首相の権力がどうしても必要とされるので、内閣府が引き受けざるを得ない構図です。

また、首相をそばで補佐する内閣官房は、安倍政権で比重が変わりました。安倍政権では、首相官邸の官僚動かし、官房長官の権力を大きくすることで内閣官房が引き受けました。内閣府と内閣官房の位置付けを含め、やらざるを得ない仕事をどう処理していくのか。その方向が見えてきま

した。

■だいたいと難しさ

だいたいとは時代の話がダイレクトに分かることです。資料をたどっていくと、そのときのダイレクトな政策や政治、行政の流れが見えていきます。ちなみに流布している話とは、違った観点から評価を下せる面白さもあります。

難しさは、現在進行形の話では、事態があまりに急速に動くので情報が氾濫しやすいということ。ヒアリング以外の方法で論文を書くことにはなりますが、近年は公開されている資料が膨大で、読み切れない悩みも抱えています。

■これから

外務省や財務省など普通の省庁の大臣と、大臣を支える官僚の役割を研究テーマに据えます。1990年代、各省庁の大臣は、実権の乏しい「行政的政治家」と言われていました。20年以上が経過して、大臣の補佐機構がどう変わったのか検証したいと思っています。